

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

表面的な改善など考えない 世の中を根本から変えていく

岐阜県立可児高校
進路指導部副主任

浦崎太郎

うらさき・たろう ● 1965年生まれ。広島大学大学院教育学研究科修了。岐阜県立恵那那高校、岐阜高校、関市立洞戸中学校、羽島北高校、岐阜県博物館を経て、2011年より可児高校に勤務。担当教科は物理。

文／堀水潤 撮影／渡邊カP 66、67除く

浦崎太郎という、おとぎ話の主人公に似た名の教員が、岐阜県にいます。「日本の再生は、地域の教育力にかかっている」という確固たる信念のもと、公私の区別なく県内外を駆け回り、地域教育の活性化に没頭。岐阜県博物館勤務時代は、県内各所で社会教育プロジェクトを仕掛け、現任校では、学習に対する動機づけを促す授業や、リーダー養成教育なども試みている。

フェイスブックなどを通じて盛んに情報を発信し、外部に人脈も多い。描くビジョンの大きさ、熱意と実行力、緻密

かつ論理的な言動は、多くの人が認めるところだが、組織の中でそれは時として、夢想家、押し強さ、過剰な自意識に映りかねない。個性的な人物であることは間違いなく、そうした人物像にも迫りながら、氏の描く理想を露わにする。

浦崎がなぜ「地域の教育力」に関心をもちようになったかを理解するためには、1996年当時勤務していた岐阜高校で、進学実績の低下という問題に遭遇した時点までさかのぼる必要がある。「この現象がなければ、その後、何も動いていなかった」というほど、県随一の進学校を襲った事象は、30代前半の血気盛んな教員にとって衝撃的だった。

しばらくは様子見の状態であったが、3年後の入試実績が事態の深刻さを増幅させた。それに伴い、99年に将来構想委員会が立ち上がると、浦崎らは各地の高





校を視察。学校改革に努めた。

長らく3年生の担当であったが、翌2000年に1年の学年団に入ると、「これで失敗したら岐阜県全体が沈没する」という危機感のもと、徹底した学習習慣作りを断行。進路指導部員として「進路指導3カ年計画」を構築し、夏休みに企業や研究施設、大学見学に行かせるなど、学習に対する動機づけを行った。

「学力の土台は人間力。その部分の手当をしつかりしない限り、ラストスパートはかからないと感じていました」

当時の自分なりに打てる手はすべて打ち、優秀な同僚や生徒に恵まれたこともあって、数年後、東京大学の合格者数など進学実績は回復。しかし、浦崎はその数字に疑問を抱いた。

「確かに数字上の進学実績は回復しました。しかし生徒が秘めている可能性や底力を十二分に引き出せたか、と考えるとクエスチョンマークがたつきます。気分はずつきりしませんでした」

自分としてできることをやった結果がこれだ。職場での限界を感じた浦崎は、学力低下問題の本質を二人探るようになる。

った。その過程で、地域の教育力に注目するようになる。すなわち、「小・中・高等学校で何が起きている。ただ、小・中の先生方も大変な思いをしているようだ。であるなら、学校以外に問題があるのだろう。家庭がおかしいとは言われるが、そのせいにして解決にはいたらない。家庭をサポートするのは地域であり、ここでは自然環境や遊び場、コミュニティーの崩壊という大きな課題がある。それらは本来、学校の学びを支えるものであり、その欠如こそ学力低下の本質的な原因ではないか」というロジックであった。

地元で町づくりに携わる

コミュニティーの崩壊とはよく言われる言葉だが、では、成り立っている状態とはどういう事なのか。あるいは、現実的にどう動けばこれを活性化することができなのか。浦崎はそのヒントを、二冊の本に求めた。以前から面識があり、新潟を中心に各地で町づくりの活動をしている清水義晴氏の『変革は、弱いところ、小さいところ、遠いところから』（太郎次郎社）という

共著だ。そこには、ワークショップやファシリテーション（グループ活動を円滑に進行する技術）を生かした町づくりの実例が豊富に描かれていた。

「地域には、さまざまな教育関連の団体があります。通常はばらばらに活動しています。地域がまとまり、協働で事を起こす際の成功の鍵は、それらをつなぎ、会議などをうまく運営する技能にあることを知りました。清水さんは町づくりのコーディネーターと称しており、ならば私は教育コーディネーターという役割で、学校での学びを支える地域づくりをした」と強く思うようになりました」

浦崎は管理職に「ここに残ってできることは少ない。地域の教育力を立て直すに限り、今のような状況は続くのだから、地域と学校をつなぐ教育コーディネーターとして外に出してほしい」と訴えた。それは焦りから出た言葉であった。

「同校で8年間勤務し、そろそろ異動の時期でした。年齢も間もなく40歳。今、抜本策を打ち立てる仕事に体当りできる環境を獲得できなかったとしたら、この先、自分は納得のいく教員生活を送ることができるのだろうか。そう考えるとゾツとしたのです」

真剣さだけは伝わったようだが、そんな突拍子もない希望が通るはずもなく、岐阜高校での勤務はもう1年続くことに

なる。浦崎はその1年を使い、個人的な活動に力をいれた。夏には清水氏を名古屋に招き、コーディネーター養成講座（集団創造化プログラム研修）を受講。ファシリテーションの技術を磨いたうえで、双子の息子が通う小学校がある地元・岩野田北地区で「まちづくり協議会」という団体を作り、住民同士が絆を深め、協働する、コミュニティーの再生活動を始めた。

「教育とは、子どもに縁のある大人が、さまざまな場であらゆる時間に行うもの。教育に対する地域の当事者意識が低いと、子どもへの意識変容を促す場が学校に限られてしまいます。役所に頼らず、地域が協力して、町づくりをすることで、子どもたちに社会教育の場を提供しましょう」

こうした熱のこもった主張は自治会をはじめ諸団体を動かし、市のモデル地区にも選ばれたことで、やがて地域の中核的な団体として活動するようになる。

無論、これらは公務外での活動だ。ファシリテーションの技術は、後に授業やLHRなどで生かされるが、この時期の浦崎の教科指導やクラス運営のスタイルは完全に一方通行。17時を境に学校と地元で二重人格的な生活を送っていたという。

山間部の中学校での気づき

ある意味で希望が通った形といえるだ



上. 地元の名水を名古屋市内で販売する洞戸中学校生。(2004)
下. 「自河自費プロジェクト」で河川に親しむ小学生ら。(2009)

日本の再生は 地域の教育力に かかっている

つなげる仕組みが作られていった。

中学校ではこのほか、自学自習習慣の身につけ方や、学習意欲の高め方、また、今でいうアクティブラーニング（生徒主体の能動的な学習）の手法など、さまざまなことを学んだ。

「たった1年でしたが、10年分の勉強をさせてもらった気がします。ここで学んだことを生かせば、素晴らしい指導ができるはず、という手応えをもちました」

事実、次に異動した羽島北高校の2年めに1学年主任をまかされると、それらをふまえた初期指導を展開した。

「それまでの私には、教員は教え込むものという固定観念がありました。しかし、これからは生徒の自主性に期待し、生徒ができることは生徒にまかせよう。授業中も生徒同士が交流できるようにしよう」と、考えを改めました。ある意味、地元での町づくりと同じようなスタンスで、授業に臨むようになったのです」

残念なのは、翌年には、岐阜県博物館への異動を言い渡されたことだ。

「学力崩壊後の沈滞ムードが流れるなか、指導しだいで、人間的にも学力的にも変わるんだ、という実績を作ろうと決意し、1年間かけて、ようやく土台ができたというタイミングでしたから、なんて残酷な、という気分でした」

ただ、結果的にはこれが吉と出る。

全面的な書き直しを命じられたほどだ。

「ここなら何かできそう、という予感はずながら、しばらくは突っ込んだことまで話せる状況にありませんでした」

念願の地域教育に携わることができたのは6月。職員会議の席上、役場から「この前の件、話をつけておいたから」という電話が入つてからだ。この前の件とは「地元の名水『高賀の森水』を、都市部で生徒に販売させてみたい」という、ある同僚の思いつきのこと。固定化された人間関係の中で、どこか大人しい生徒たちに自信をつけさせたいという思いから生じたアイデアであった。これに賛同した役場の若手が、名古屋市内で開催される物産展に便乗する段取りを整えてくれたのだ。そこで急ぎ

変更。さっそく、翌日の授業で、名水と水道

ろう。翌04年、39歳になっていた浦崎は、中高交流人事の一環で、洞戸村立(現関市立)洞戸中学校に異動となった。岐阜市内から車で40分ほどの山あいにある、全校生徒60人(当時)ほどの小さな学校だ。中学校勤務は心身ともに苦労が伴うと聞いていたが、市中の学校ではなく、地域とのかかわりが強そうな山間部の学校に異動させてくれたことに感謝するとともに、何としても成果をださなくてはという思いを強くした。

「無理を言つて異動させていただいたわけですから、何も収穫がなかったのでは無様です。与えられた期間は1年間。待ったなしという気持ちでした」

とはいえ、中学校では文化の違いに戸惑った。用語の使い方すら高校とは違う。苦勞して書き上げた研究授業の指導案も、

博物館でのアウトリーチ事業

岐阜県博物館は、関市中心部からやや離れて位置する県営の総合博物館だ。設立は76年。施設の老朽化が進んでおり、また、昨今の厳しい財政状況により、館の存在意義を問われていた。赴任後、学校とはまるで異なる文化に戸惑っていた浦崎は、「将来構想委員会」が設置され、再生プロジェクトのメンバーに選ばれるや、がぜん張りきった。

博物館の意義の一つは、文化振興の担い手、言い換えれば地域の担い手を育成することだ。地元・岩野田北地区での活動を除き、洞戸中学校勤務以降、地域教育の仕事から遠ざかっていた浦崎にとって、館の危機は、地域の活性化を公務として存分に行えるチャンスでもあった。

1年におよぶ議論を経て、博物館の基本方針が「県民が実物や実体験を通して郷土の価値を発見できるようにする」と定まるや、それを具現化するため、博物館としてアウトリーチ事業（地域出張サービス）に乗りだすことを決定。09年度の事業として、「自河自賛プロジェクト」なるものを開催した。これは、県内6つの河川で、カワゲラウオツングや河原の石調べなどを実施し、身近な河川に触れてもらうという、県民参加型の事業だ。半年に

及ぶプロジェクトは二応の成功を収めたものの、単発の体験イベントに終始し、次への展望が開けないという課題も浮き彫りになった。

浦崎は、地域の担い手を育成するような、ストーリー性のある学びの機会を作りたいと感じた。ただ、人員と予算が限られている以上、博物館が主導する事業には限界がある。そのため、翌年度以降、主体はあくまで地域にあり、博物館はそれを支援する形に転換する必要があった。

そこで打ち出したのが、「地域が主体となつて、地元に着目した社会教育プログラムを実施し、それを通じて、地域住民が当事者意識をもち、地域教育の担い手を育成していく」というプランだ。

まずモデル地区で独自の社会教育プログラムを実施し、その成果を全県に広める

子どもの成長を考えると 今のペースでも 間に合わない



上.阿寺断層研究会を結成した中津川市やさか地区の中学生。(2011)
下.可見高校「リーダー養成塾」でのグループワーク。(2012)

というのが、浦崎の描いた青写真であった。例えば、ある地区では、中学生が地元の

活断層を研究・発表するという活動を通じて、中学生自身や地域住民に郷土に対する誇りをもたせる試みを展開（後述）。

またある地区では、「郷土展望講演会」を毎月実施し、講師役として、これまで地域活動に積極的にかかわってこなかった人を据えることで、新たな地域教育の担い手を育もうとする取り組みを行った。

こうしたプログラムを立案するに際しては、浦崎個人の地元・岩野田北地区での経験が生かされている。洞戸中学校に異動した04年に「まちづくり協議会」を設立したことは前述したが、手探り期間を経て、浦崎は「鳥羽川エコまつり」（08年）、「鳥羽川再生プロジェクト」（09年）などのプロジェクトを成功させている。いずれも、

地域の素材を社会教育プログラム化した取り組みである。

「中学校での体験や、地元での町づくりの経験がなければ、博物館でアウトリーチ事業をやるうなどという発想は出てこなかったでしょう。地域に入り、地域を変え、地域の担い手を育むノウハウがあったからこそ、できた提案でした」

阿寺断層研究会というドラマ

話はそれだが、モデル地区では具体的にどのようなことが行われたのか。一例として、中津川市「やさか地区」における中学生の成長物語を紹介しよう。

同地区は、山口、坂下、川上の3地区を指す中学校区。県の東部に位置するのどかな地域だが、地質学者の間では、70キロ



自分がしているのは 教育の土台を 作る仕事

「保育園で泣き虫だった子たちが、大勢の大人を前に、地域の財産でもある阿寺断層について堂々と解説をしています。こんな感動的なシーンはありません。この子たちこそ地域の宝だと思いました」

ちなみに、このプログラムは、文部科学省の公募事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究」に採択されていた。もはや、博物館の本来業務を超えるような事業になっていたのだ。11年に岐阜市のホールで行われた同事業の研究報告大会でも5人は、250人もの聴衆を前に自分たちの取り組みについて発表。さらに、翌12年には、岐阜県博物館において研究成果を発表する機会を得た。その日、仕事の都合でやむを得ず欠席した安江氏は話す。

「それまでの発表の場では、横に必ず私がいきましたが、この時はすべて自分たちがやるしかありません。それをみごとにしとげた。大変な成長だと思えます」

今、彼らは高校生。土壌に関心があるという理由で農業高校に進学した生徒や、断層について独自に調べた情報をこまめに送ってくる生徒もいるなど、交流は続いている。会話が難しい専門用語が混じるようになり、安江氏もおちおちとはしてられない。東日本大震災を経験したことで、自分たちの研究が実生活とつながっているという実感もわいたはずだ。

メールにおよぶ活断層「阿寺断層」が走っていることで知られている。住民の多くは、その存在こそ知っているものの、詳しく説明できる人は少ない。そんなところに、博物館から話が舞い込んできた。「中学生有志に断層を研究してもらい、その成果を住民に発表するという活動を通じて、地域教育の担い手の育成や、住民の意識変容を図りたい」という申し出だ。これに、地元自治体や中学校教員らが賛同した。同事業のキーパーソンとなった坂下公民館の原正幸館長は言う。

「私にとって、渡りに船とでもいうべき話でした。活断層は恐ろしいものですが、このように注目される、研究や観光の素材でもあります。何とかして、地元の若者に興味をもってもらいたかったし、次世代へ伝えていく必要性を強く感じています」

た。そんなところに、浦崎先生が綿密に練られた計画をもってきてくれたのは、本当に幸運でした」

呼びかけに応じた中学生は最終的に5人。奇遇にも、原館長がかつて園長として勤めていた保育園の卒園生が3人含まれていた。彼らは、「阿寺断層研究会」を結成。浦崎の教え子でもある地元出身の地質学者、安江健一氏のもと、調査・研究に携わった。同氏は、地域教育の重要性を訴える浦崎に強く賛同していた。

「私は、地元に貢献したいという思いが強くて、阿寺断層についてもよく講演を行っていました。ところが労力の割に、過性のもので終わっている感じもしていました。そのため、阿寺断層について地域で教育する仕組みを作り、後進に繋ぐ体制ができれば、研究者の負担も減るし、地域のために

なると思っていました。ですから、浦崎先生のビジョンと完全に合致したんです。先生は何かあるたびに、往復3時間かけて関市から来てくださいました。教育に対する高い志や哲学をもちながら、緻密で細かい目配りもされるすごい方です」

5人の中学生の阿寺断層に関する知識はゼロに近い。最初のうちは、フィールドワークでも、安江氏の後ろについて話を聞くことが多かったが、「教えこまず、自分たちで考えさせるよう意識した」という同氏のやり方が浸透。夏休みを境に、自分たちだけで議論を深めるなど主体性を発揮するようになった。そして、その年の冬に行われた「阿寺断層一般見学会」では、参加した40人の住民のガイド役として、拡声器を片手に断層について説明できるまでに成長した。原館長は言う。

一連の取り組みは、10年度版の『文部科学白書』でも紹介された。浦崎は言う。「自分たちのしていることは、決してローカルな思いつきではなく、全国的に求められるだけのクオリティーがある。大げさな言え、自分たちは今、高校教育の抜本的な立て直しにも貢献しているのだ、と強く感じていました」

可児高校での挑戦

4年間の博物館勤務を終え、11年、浦崎は可児高校に赴任した。この異動もまた、素直によるこべるものではなかった。

「再び生徒の前に立てるようになったことはうれしいのですが、地域の教育力の再生なしに、果たして納得いく教育活動ができるのだろうかという疑問が残りました。地域の教育力を再生する見通しや技術をもっている自分がやらずに、誰がそれをやるんだという気持ちでした。とはいえ、目の前の生徒にとことんかわり、良い方向に導く、ことこそ教員の本分です。そうやって頭を切り替えています」

現在の可児高校は、落ち着いた雰囲気な包まれた進学校だ。一時期、浦崎が岐阜高校で体験したような学力崩壊や生徒指導上の課題もあったようだが、心ある教員の体を張った生徒指導や、偏差値にとられない進路指導などで克服していた。

課外活動も活発で、清掃も行き届いている。生徒のためなら苦労はいとわないという教員がそろい、朝に夜に休日に、熱心に指導に当たっている。

「業務量が多いなか、目の前の生徒に「生懸命向かう、この学校の先生方には頭がさがります。公務外の活動にも力を割き、好き勝手にしている自分のような者が、例えそれが、教育の下支えをする活動だ」という信念があるにしても、偉そうなことを言える立場にありません」

今は、先人が整えてくれたシステムに乗り、必要と思われることを自分なりに積み上げていく段階だと言う。それは例えば、授業に取り入れているアクティブラーニングであり、3年生を対象とした「リーダー養成塾」である。これは、経営者や大学教授、若手公務員グループを招いてグループワークなどを行う連続講座。「志なくして本気なし。本気なくして結果なし」というキャッチコピーのもと、志願者を募って実現させた進路プログラムだ。

参加者の一人、角野仁美さんは言う。「参加のきっかけは、受験勉強に迷いが生じ、気持ちの整理をしたかったからです。また、将来、教育の仕事にかかわりたいものの、漠然としておりヒントを得たかったからです。リーダー養成塾に参加したことで、前向きな気持ちになり、考えも定まってきました。私は、中学の時に描いて

いた、高校では遊べる」というイメージのまま入学したことを後悔しています。将来、こうしたいという強い動機をもって高校生活をスタートさせていたなら、勉強ももっと楽しめたろうかと、今、思っています」

同じく、山口海斗君はこう話す。

「自分は岐阜県で医師として働きたいという目標をもっています。医療は笑顔が特効薬というくらいコミュニケーションが大切な仕事。地元で働けば患者さんとの距離が近くなると思うからです。大切なのは一人ひとりの医師がどれだけ「気持ち」をもっていられるか。仮に自分でなくても、強い気持ちをもった人が医師になってくれたらうれしいです。リーダー養成塾に参加したのも、ぼく自身、そんな気持ちを強くしたかったからです」

この取り組みは、学習の動機づけはもちろん、自分を深く考える場となった。こうした生徒を増やしたいがために、浦崎は今後も駆け回っていくのだろう。

浦崎のことをブルドーザーと形容する人は多い。独自路線を貫き、時に過激な言動もするため、ブレーキ役が必要と指摘する声も少なくない。浦崎は言う。

「本来は時間をかけ、プロセスを踏む必要があるのですが、社会の動きや、子どもたちの成長を考えた時、今のペースでやっていると間に合わないという焦りがい

つもつて回るんです。私は、表面的な改善など考えていません。はしこの継ぎ足しのようなアプローチをとる気もありません。世の中を根本から変えて行こうと思つたら、のんびりしているわけにはいかないのです」

浦崎は、一般の人とは少し違う次元や時間軸の中で生きている。名前がよく似た、おとぎ話の主人公のように。(敬称略)

